

Nissink, J. B. M. (ed.) *The Eternity of the World:
in the Thought of Thomas Aquinas
and His Contemporaries.*

Studien und Texte zur Geistesgeschichte des Mittelalters;
Bd. 27, Leiden: E. J. Brill, 1990 pp.viii+100

長 倉 久 子

本書は1986年12月オランダのユトレヒトで開かれたトマス・アクィナス研究グループによるシンポジウムの発表論文六篇を編纂したものである。このグループは神学者と哲学者から成るため、シンポジウムは神学（創造）と哲学（永遠性、無限）の両方に跨がる問題、すなわち「世界の永遠性」に関するトマスの思想を中心テーマに据え、トマスの同僚たるボナヴェントゥラとの対比、更にトマスの見解が彼の死後13世紀末から14世紀初頭にかけて惹起した反響を論じている。

シンポジウムの口火を切った De Grijs は、トマスの『世界の永遠性について』（以下 *De aeternitate mundi*）の小品の類別の問題（神学的著作であるか哲学的著作であるか）を取り上げ、Hoogveld, M.-D. Chenu, I. Brady, M. Corbin, J. Weisheipl の議論を踏まえた上で、Weisheipl の見解に与してこの小品は神学的関心の下に著わされたとしている。彼は三つの理由を挙げる。すなわち、(1)「世界は始まりを有す」というカトリック信仰の前提の上に立って議論が進められていること (2) この小品におけるトマスの主たる関心は、この世界であるよりもむしろ神であり、神の本質ないし三位一体の本性であること、(3) 神について述べるに際して極めて慎重で注意深い言語上の配慮があること、である。そして De Grijs は、トマスの主たる意図は、たとえこの世界がその持続において無限であったとしても、その永遠性は神の本性に匹敵しないこと、つまり神の本性は被造的本性とは全く異なるものであることを明示することであった、と結論している。

これに対して哲学者 J. A. Aertsen は、*De aeternitate mundi* を単純に神学的著作と做すことに疑義を狭む。つまり、この著作において議論はたしかに信仰を前提とした上で進められているのではあるが、しかし、この著作の性格を類別するためには、その内容と執筆の意図を吟味しなければならない、と言うのである。なるほどト

マスの基本的立場は信仰者の立場であり、本質的に彼は神学者である。しかし哲学者としてのトマスもあることを、彼は E. Gilson に依拠して主張し、「哲学的立場の相違が神学上の立場の選択に影響する」ことをトマス自身に依って (II Sent. d. 14, q. 1, a. 2) 裏づけるのである。

De aeternitate mundi の哲学的側面を明るみにもたすために、Aertsen は先ずこの著作における議論の骨子を明確にし、それによって、この著作におけるトマスの関心が神にあるのではなくむしろ被造的実体にあること、そして議論の眼目は〈被造物であること〉と〈永遠であること〉とは矛盾を含むか否かという問にあること、を力説する。

続いて Aertsen は『能力論』(以下 De Pot.) 第三問題第十四項を吟味し、De aeternitate mundi と比較して次のように結論する。両著作において進められる議論は著しく類似しているが、De Pot. には ex nihilo の意味論的分析に関して De aeternitate mundi には見られないものがある。つまり〈無からの創造〉という概念自身には、起源の意味での始まりは含意されても、持続としての始まりは含まれない、従って、〈以前には存在しなかったもの〉が存在にもたらされた、ということは、つまり創造を世界の時間的始まりと理解することは、信仰上の事柄であると言われていることである。ここからして理解するならば、De aeternitate mundi において永遠なる創造の可能性を問うことによって、トマスは創造の概念を〈形而上学的に〉深めようとした、つまり創造の本質は時間的持続に、言い換えれば信仰によって教えられているような世界の〈新しさ〉にあるのではないことを示そうとしたのである。

更に Aertsen は『命題集註解』(I Sent. 5, 2, 2, II Sent. 1, 1, 2) におけるトマスの〈創造〉の意味論的分析を取り上げる。そこでトマスは、〈創造〉には、(1) 無からの産出であって何かを前提とする生成とは異なること、つまり〈存在の起源〉を意味すること、(2) そこには時間的前後の概念は含まれずただ本性上の前後関係が含意され、従って〈創造される〉とは〈存在における依存〉を意味すること、(3) 存在に(持続上も)先行する非存在が意味されること、という三つの点が含まれており、(1)(2)は哲学的に論証されうるが、しかし(3)は論証されえず信仰上の事柄である、そして(3)は(1)と(2)を排除しないと言う。

かくして Aertsen は、De aeternitate mundi もかかる背景で読まれるべきであって、哲学者としてのトマスの功績は、創造のキリスト教的理解における〈始まり〉の

意味を形而上学的に深めたことである、と締め括っている。

第三の論文（著者は P. Van Veldhuisen）は、先ず〈永遠なる創造〉の思想を古代ギリシャからキリスト教中世に至るまで歴史的に概観し、「はたして神は永遠より世界を創造しえたか」（永遠なる世界の創造の可能性）の問が生じてきた経緯を述べた上で、ボナヴェントゥラの見解（〈永遠なる創造〉は論理的に矛盾を含み、全く不可能である）とトマスの立場（〈永遠なる創造〉は形容矛盾とは云えない、世界が必然的に永遠であるか否かについては論証できない、永遠なる被造的世界は神の全能にてらして考えれば可能であると言える、世界の時間的始まりは哲学的には証明できず、それは信ずべきこととして信仰に委ねらるべき事柄である）とを対比させている。著者は、トマスの創造理解がボナヴェントゥラのそれと異っており、後者への批判であることも、トマスに即して明らかにしている。

第四の論文（著者は M. F. J. M. Hoenen）は、トマスの死後ただちに生じた反響を扱っている。すなわち、Hoenen は、一方でトマスを厳しく糾弾する代表としてフランシスコ会士ラ・マルのギョーム（William/Guillaume de la Mare）の *Correctorium Fratris Thomae*（1278-9）を取り上げて、マル（Hoenen の用いる略称）が批判の対象とした著作は何であり、どのように引用され、どのように批判されているか、を吟味した上で、マルはトマスの見解を常に正しく理解し正しく叙述しているとは云えないと云う。Hoenen によれば、マルはトマスの見解の三つの柱（(1) 信仰箇条は証明できない (2) 世界が永遠でないことは証明できない (3) それはただ信仰に属する事柄である）を全て誤りとしている。つまり世界の永遠性の可能性を認めるトマスの見解は哲学的にも誤りであり、神学的にはなおさら斥けられるべきことと做したのである。他方で Hoenen は、これに対して起ったドミニコ会士たちの反論（1279-ca. 1286 に出されたもので *Correctoria corruptorii* の名の下にまとめられている）を取り上げて、彼らがどのようにトマスを擁護しているかを、マルの批判の順序に従って、同じく彼らがトマスのどの著作からどのように引用しているかを吟味している。Hoenen は、マルがトマスを批判するに際して議論の根拠としている彼自身の創造理解を要約しているが、それは師であるボナヴェントゥラの創造論を継承するものである。これに対してドミニコ会士たちの反論は、トマスに言及するにせよしないにせよ、トマスの創造論をよく理解し、彼のもたらした新たな創造理解、とくに〈無からの創造〉の新たな意味を擁護し、それをより鮮明にしようとするものであ

った。Hoenen は、トマスのどの著作がどのように引用されているかを吟味することによって、トマスの創造論が彼の死後どのように受容されていったかを浮び上げさせており、当時の神学界の状況を垣間見させて歴史的興味をそそっている。第五論文（著者は P. Van Veldhuisen）はボナヴェントゥラの孫弟子にあたるフランシスコ会士メディアヴィラのリカルドゥス（ca. 1249-1302）のトマスに対する反論を取り上げている。リカルドゥスの議論は概ねホナヴェントゥラを継承するものであるが、「永遠よりの創造は〈神は必然的に創造しなければならなかった〉ことを意味し、これは神の自由からして不可能である」と議論するところにリカルドゥスの独自性が見られることを著者は指摘している。

最後の論文（著者は J. M. M. H. Thijssen）は、14 世紀初頭イギリスで活躍した三人のフランシスコ会系の神学者（Henry of Harclay, Thomas of Wilton, William of Alnwich, o.f.m.）の反論を取り上げている。三人はいずれも無限概念からトマスを攻撃しているが、それは既にボナヴェントゥラが用いた議論を更に哲学的に徹底させようとするものであった。

本書の著者たちはいずれもトマスをはじめ関連するテキストを綿密に読み、トマスとボナヴェントゥラ、およびそれに続く反論者たちと擁護者たちの議論を方法的に詳しく分析しているので、両陣営の創造論の相違を浮び上げさせて興味深い。また問題の推移（神と被造物の関係という神学的観点から無限という数学的観点に創造論の焦点が移っていく）も明らかにされていて、13世紀後半から14世紀初頭にかけての西欧の思想界の情景を想像させてくれる。しかし、何故にこれらの神学者たちは世界の永遠性の問題に関して真向から対立したのか、創造の理解に関する両者の相違（それは“ex nihilo”を巡って生じてくる）は根本的に何に起因するのか、無限や時間の理解は両者において同じであったのか否かなどについて突込んだ議論はなされていない。両陣営の対立は単なる神学思想界における保守と革新、フランシスコ会系とドミニコ会系の敵対という単純な二分法で考えることはできないことは指摘されており（第六論文末尾）、また Aertsen は Gilson に倣って（またトマス自身にも依拠して「哲学的立場の相違が神学的立場の選択に影響を及ぼす」ことを指摘しているが、しかし、具体的にそれを示してはいない。筆者の関心は、この両者の哲学的立場の相違は具体的にいかなるものであり、またその神学的立場の選択にどのように影響しているかにあるので（拙稿「ボナヴェントゥラにおける創造の問題」『南山神学』1, 1978, 「トマ

スの創造論—ボナヴェントゥラの創造論に対するトマスの批判』『中世思想研究』XXI, 1979, *Un Dieu transcendant, Créateur et Exemple, selon Saint Bonaventure: Un essentialisme cohérent*, 1988, 「トマスにおける実在と言葉—日常言語の分析から *esse* の意味へ」『中世思想研究』XXXII, 1990. 参照), この点の議論がない, 或いは課題としての指摘がないのは残念に思われる. この点がクリアされないならば, 両陣営の議論はいつまでも平行線を辿るであろう.

平石善司著『フィロン研究』

創文社, 1991年, vii+429頁

水 垣 渉

本書の中核をなしているのは, 著者が1961年, 広島大学から文学博士号を授与された学位論文である. その主論文が第一部「フィロンのロゴス論」であり, 副論文が第二部「フィロンと初期キリスト教思想」であった. 著者が50年代の後半に精力的に行った研究の成果が一書にまとめられてようやく一般の学界に提供されることになったことを率直に喜びたい.

以上のような本書の成立事情からして, この書評には, 60年頃と現在という, フィロン研究史における二つの段階・水準のそれぞれに照らして批評するという二重の課題が与えられることになる.

まず現在の研究状況についていえば, 新しいテキストと翻訳, 古代語訳の研究と評価において30年前に比べて相当の進歩が認められる. また隣接領域における研究の関心の変化に対応して聖書解釈法, 中期プラトン主義などのギリシア思想との関係, ヘレニズムとの関係におけるユダヤ教の位置づけなどの諸点において, フィロン研究は新しい段階に入っているといえる. 研究テーマの特殊細分化も著しい. しかしこのような現段階の研究状況の中に本書を置いても, 本書の価値はいささかも減じない. その理由は, 本書がテキストそのものに基礎をおく根本的研究であり, 今日においても新鮮な——そしてその後の研究の進展によって確証され, かつ今後の研究